

136. 昭和59年度 県指定文化財の紹介 その1

建造物

1. 西教寺本堂 一棟 江戸時代(元文4年)

桁行七間、梁間六間、一重、入母屋造

向拝三間、本瓦葺、

背面裏堂附属

附 棟札 一枚

上棟元文四己未年六月五日の記があるもの

こけら板 二枚

元文二年六月四日の記があるもの

元文三庚午年の記のあるもの

野地板 一枚

出面の記のあるもの

獅子口 一個

寛延二歳巳八月吉日の笠書があるもの

向拝留蓋瓦 二個

大津市坂本本町 西教寺

西教寺の地は延暦寺三塔の中で横川に所属し、第十八世の天台座主慈恵大師(912~985)が念佛の靈地として開き、文明18年(1486)真盛上人が入寺して栄えたという。

現在の本堂は享保16年(1731)の起工、元文4年(1739)に上棟して、同年の秋には一応の落成をみる。このときの屋根は応急的な「こけら葺」であって、内部造作、縁廻りの一部および建具などは未完成であった。寛延2年(1749)には屋根を本瓦に葺き替えるが、前記内部造作などは依然としてそのままであった。安永3年(1774)にいたって縁高欄に擬宝珠を取り付け、

同4年に内部の天井が張られて、ようやく未完成部分が整備された。

本堂は桁行七間、梁間六間に切目縁を廻し、正面に三間の向拝がつく。背面には桁行一間、梁間一間もこし付の裏堂が接続する。

柱は向拝と裏堂を角柱にするほかは、すべて円柱、側廻りの飛貫は虹梁形を入れ、頂部には粽を取り台輪をのせる。組物は出組にして、中備えに幕股を入れ、軒支輪をつける。軒は二軒の繁垂木、屋根は入母屋造の本瓦葺。妻飾りは虹梁を二重に架け幕股、大瓶束などを巧みに取り入れて、華やかに飾っている。

柱間装置は正面の中央五間が棟唐戸、両端間が蔀戸。両側面は前二間の外陣にあたる柱間が蔀戸、次の間から棟唐戸、蔀戸、棟唐戸を交互に備え、最後端間に火頭窓を入れて近世らしい構えをみせる。

内部は前二間を外陣とし、内外陣境の中央二本の柱を省略して三間架け渡しの大虹梁を入れ、虹梁下に壯観な十六羅漢の欄間を入れる。内部柱は四天柱を除いてすべて天井を貫通して小屋梁を受ける。内陣は四天柱をたて須弥壇を設け、柱上には三手先斗栱を組み、尾垂木鼻に精巧な龍頭を彫る。四天柱と両脇佛壇の柱頭には金欄巻の彩色を施し、虹梁形頭貫、台輪、組物



西教寺本堂

正側面全景

などに極彩色の文様を描き堂内を荘厳にしている。

県下の近世佛堂のなかでも規模が雄大で材質、意匠が秀れていることでは屈指のものである。十八世紀の天台宗本堂の発達した平面、大型建築の卓越した木工技術を知るうえでは重要なものである。

2. 観音寺本堂 一棟 江戸時代（正徳5年）

桁行五間、梁間五間、一重、入母屋造

向拝一間、棟瓦葺、背面一間軒下張出付

坂田郡山東町朝日 観音寺

観音寺は天台宗に属し、千手観音を本尊とする。正しくは伊富貴山観音護国寺といい、その始まりは伊吹山中にあって、弥高、大平、長尾の三カ寺とともに伊吹山四カ寺の一つであったが、正元年間（1259～1260）に現在地に移り弘長年間から弘安年間にかけて寺觀を整えたという。

現在の本堂は再興記録によれば、正徳4年（1714）に着工し、地元の大工棟梁宮部太兵衛によって同6年（1716）に竣工した。

南を正面にして建ち、建物は桁行五間、梁間五間に背面一間通りの張出しを軒下につくり、ほぼ正方形の平面になっている。高欄つき切目縁を廻し、正面に一間の向拝をつける。向拝を除く柱はすべて円柱で、側柱頂部に粽を取り、頭貫を虹梁形（背面は頭貫）にして台輪をのせる。組物は出組で中備に幕股を入れ、軒支輪をつける。軒は二軒の繁垂木である。屋根は入母屋造、建立時は葭葺であったが、明治元年に現在の棟瓦葺に改められた。妻飾りは二重虹梁とする。

柱間装置は正面が五間とも棟唐戸、両側面は前より蔀戸、板扉、蔀戸を交互に構え、第四間が中敷居を入れた板戸引違、最後端間は脇佛壇庇を附書院風に縁の上に張り出した特異な意匠にしている。背面は中央に棟唐戸を構えるほかは板壁にする。

内部は前寄り一間通りを外陣とし、後方四間のうち桁行よりみて中央三間を内陣、両脇の一間を脇陣とする。内部の桁行における柱は側柱筋と、くい違ったところに立てる近世的な手法を用いている。

内外陣境は柱頭に粽をとり台輪をまわして組物、幕股を側廻りと同じように構える。内法には長押をつけ各柱間を欄間で飾る。内法下は開放にするが中央三間と内陣、脇陣境は低い結界を設ける。背面側通りの中央には二本の來迎柱をたて禅宗様頸彌壇を造り付けて厨子をおく。来迎柱上の組物は三手先に尾垂木を入れた豪華なものとし、柱、頭貫、長押、

来迎壁などを金箔で飾る。両脇佛壇は背面の軒下庇に佛壇を取り込み、側面には縁の上に突き出した附書院風の脇佛壇を構える。

内陣、脇陣は雲板支輪を廻した格縁天井とし、中陣、内陣境の天井から垂れ下がる火頭形の雲龍の彫刻は圧巻である。外陣は雲板支輪に鏡天井を張り龍の絵がかけられている。

この本堂は細部意匠が秀れ、なかでも彫刻の豪華さは県下の近世を代表する五間堂である。「再興記録」によって大工棟梁、彫刻等の作者が明らかであり当時の建築過程を知るうえで重要なものである。

絵画

1. 絹本着色約翁徳侯像 一幅 (鎌倉時代)

文保三年の自賛がある

神崎郡永源寺町大字高野 永源寺

本紙 縦110.3cm 橫52.4cm

絹本着色 掛幅装（一副一鋪）

曲象に坐す禪僧を画面に大きく描く。顔を左（向かって右）に向け、茶地の衲衣に袈裟をつけ、右手に竹籠を持ち、左手は掌を仰いで指を軽く曲げる。下方には踏床の上に一足の沓を表す。

画面上部の賛から約翁徳侯の肖像であることがわかる。

（説明）鎌倉時代の臨済の高僧、約翁徳侯（1244～1320）の頂相である。約翁は、建長寺の蘭溪道隆に師事し、後に入宋し、帰国後は、鎌倉の禪興寺・建長寺、京都の建仁寺・南禪寺などの住職を歴任した。晩年は、後宇多上皇の帰依を受け、生前に佛燈国師の号を賜っており、弟子に寂室元光らがいる。

図は曲象に坐し、右手に竹籠を持った全身像で、茶地の衲衣に袈裟をまとう。肉身は肉色に塗り、画絹の



観音寺本堂

正面側面全景



筆を用いて師の謹厳なおもかげをよく描写している。画面上部に、応仁の乱を避けて永源寺に疎開中であつた五山僧、横川景三(1429~1493)の贊があり、文明2年(1470)に村井(日野町)の景珠庵における供養のために本図が描かれたことが知られる。

寂室歿後、およそ百年後の頂相である

絹本着色約翁徳儕像(永源寺)

裏面から金箔を貼る、いわゆる裏箔の技法を駆使し、温和な老僧の姿をよく表している。画面上部の自贊から文保3年(1319)、75歳の寿像であることが明らかであり、わが国に現存する頂相のなかでも特に注目される作品である。

2. 絹本着色寂室元光像 一幅 (室町時代)
横川景三の贊がある

蒲生郡日野町大字西大路 清源寺

本紙 縦90.7cm 横37.2cm

絹本着色 掛幅装(一副一鋪)

曲衆に坐す禪僧を画面に大きく描く、顔を右(向かって左)に向く、納衣の上に袈裟をつけ、右手に警策を持ち、左手は拳をつくる。下方に踏床を置き、沓をのせる。

画面上部に横川景三の贊があり、本図が寂室元光の肖像であることがわかる。

(説明) 永源寺の開山、寂室元光(1290~1367)の頂相である。寂室は美作高田(岡山県)に生まれ、16歳で鎌倉の禪興寺の約翁徳儕に師事し、元光の名をうけ、後に元に渡り、中峰明本に謁し、寂室の号を得た。晩年の康安元年(1361)、佐々木氏頼(雪江景永)の帰依をうけ、高野の地に永源寺を開き、京都・天竜寺、鎌倉・建長寺など多くの名刹からの招きを固辞して永源寺に留まり、貞治6年9月1日、78歳で示寂した。諡号は圓應禪師。

図は、警策を持ち、曲衆に坐す全身像で、面貌は細

絹本着色寂室元光像(清源寺)

が、永源寺に現存する塑造寂室和尚坐像(重要文化財)と比較しても十分に肖像性があり、数少ない寂室元光の頂相として価値は高い。

彫刻

1. 木造地蔵菩薩立像(若宮神社地蔵堂安置)

一軀 平安時代

近江八幡市北津田町 大嶋神社・奥津嶋神社

像高 178.2cm

頭部円頂・白毫墨彩。耳朶環状。三道刻出。着衣は右肩から右腕にかかる偏衫を着し、大衣は左肩をおおい、右腋下をめぐって衣端を左背側方に垂らす。左手は臂を軽く前方に曲げて垂下し、錫杖を執る。右手は屈臂して掌を仰ぎ宝珠をのせる。腰をやや左に捻り、両足を揃えて立つ。

台座は三重蓮華座、光背は輪光背(ともに後補)。(説明) 大嶋神社・奥津嶋神社の末社、若宮神社に隣接する地蔵堂に安置される像で、地元では地蔵菩薩として信仰されている。頭部を円頂とし、右手を曲げて宝珠を執り、左手は体側に添って下げ錫杖を握る姿で、通形の地蔵菩薩の手の位置と比べると、左右が逆になっているところに特徴がある。

構造は頭体を通して桧かと思われる一材から彫成し、像底から三道下あたりまで、うろ(空洞)がある。おそらく由緒ある靈木から彫成したものであろう。体部は幅広く両臂の張りも充分であり、胸、腹、腰の肉付きがたいへん豊かで、実に豪快である。下腹のあたりに

U字形の衣文を装飾的に表し、それが両脚の間を流れ
Y字形の衣文をつくる。このようなところは、奈良・
元興寺の薬師如来立像(国宝)の作風に通じるところで、
全体に平安時代初頭(九世紀)に盛行した一木彫像の特
色が顕著である。

だが、重厚な体部に比べ、頭部は後世に手が入り、
迫力に欠けるうらみがある。造像当初の頭部が如来形
であったのか、菩薩形であったのか、今となっては明
らかにできない点は残念なことである。

2. 木造菩薩形立像 一軸 平安時代
甲賀郡石部町大字東寺 長寿寺

像高 156.0cm

垂髪を結い、天冠台下の地髪は毛筋彫りとする。白
毫相(亡失)。耳朶環状。三道彫出。条帛、天衣をつけ
下半身に裳をまとう。左手は屈臂して第1・3・4指
を捻じ、右手は臂を軽く曲げて持物を執る。腰をやや
左に捻って直立する。

台座は三重蓮華座(後補)。

(説明) 長寿寺本堂(国宝)の後陣に安置される像で、
近年までは阿弥陀堂に丈六の阿弥陀如来坐像(重要文化財)
とともに安置されていた。左手を上げ、右手を下げて蓮華を持つ姿で、地元では聖観音と称している



木造地蔵菩薩立像
(大鳴・奥津鳴神社)



木造十一面觀音立像
(白毫寺)

が、観音の標識がないので、菩薩形立像と呼ぶのが穩
当であろう。桧材の寄木造り。頭体を通して、体側で
前後に二材を寄せ、三道下で頭体を割り離し、内割り
を施す構造である。漆箔仕上げで、目を彫眼とする
ところは古様である。面貌・姿態ともに穏やかで、平安
時代後期の菩薩像の様相を示しており、十二世紀の制作
と考えられる。

3. 木造十一面觀音立像 一軸 平安時代
甲賀郡土山町大字野上野 白毫寺

像高 170.3cm(頂上面を除く)

垂髪を結い、頂上に仏面、地髪上に十個の小面を表
す。天冠台下の地髪はまばら彫りとし、耳朶環状、三
道を彫出する。条帛をつけ、天衣は両肩から垂下し、
両前膊部内側にて反転し、体側に垂れる。下半身に裳
(折返し二段)をつけ、裳裾が両足の甲にかかる。左手
は屈臂して花瓶を執り、右手は軽く曲げて垂下し、掌
を前方に向けて錫杖を執る。

台座は四重蓮華座。光背は輪光背(後補)。

(説明) 髮頂に仏面、天冠台上の地髪に十面を戴き、
条帛・天衣をかけ、左手を曲げて花瓶を執り、右手は
垂下して直立する通形の十一面觀音像で、両脇に不動
明王立像・毘沙門天立像を從えているところから、天
台系寺院に祀られてきたことも考えられる。

頭体を通して桧の一材から彫成するもので、像底か
ら体側に添って、像背の襟までを前後に割り離し、さ
らに頭部を両耳の後で前後に割り、それぞれ内割りを

施す構造から
なり、素地仕
上げ、目を彫
眼とする。

ふつらと
した顔に切れ
長の目を表し、
穏やかな彫り
口と、動きの
ない体勢、浅
い衣文などは、
本像が平安時
代も終りに近
いころ(十二
世紀)の制作
であることを
物語っており、
等身の十一面
觀音の優品と
して注目され
る。



木造菩薩形立像(長寿寺)